

マタイ伝4章1-11節 「誘惑を受ける時」

1A 御霊の導き 1

2A 肉の欲への訴え 2-4

1B 肉と霊の対立

2B 御言葉による克服

3A 目の欲への訴え 5-7

1B 人あるいは神からの認証

2B 主への試し

3B 文脈を外した御言葉

4A 高ぶり 8-11

1B 神の立てられた目的 8

2B 神の定められた手段 9

3B 神への礼拝と服従 10

5A サタンの休戦 11

本文

マタイによる福音書 4 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びはマタイ 3 章まで来ました。今日は午後に 4 章を一節ずつ、じっくり学びます。今朝は、1 節から 11 節まで、イエス様が誘惑を受けられたところに注目していきたいと思います。イエス様は、バプテスマのヨハネから水のバプテスマを受けられました。その時に、天から鳩のように御霊が降りて来て、かつ天からの声で、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」とありました。父なる神が、イエス様をご自分の愛する子、神の子であるとし、またご自分のしもべとして選び、それを喜んでいるとしています。そして、この関係を最も嫌う存在がありました。それが 4 章の始めに出て来る出来事です。悪魔が、神に愛され、神に選ばれているというその関係を憎み、それを潰しにかかろうとしています。

悪魔は今も生きています。この世を支配しています。そして、神に愛され、神に選ばれているということを最も嫌い、キリストにあつて愛されること、また選ばれていることを何とかして潰そうとしてくるのです。それが、私たちにある戦いであり、信仰の戦いと言ってよいでしょう。

信仰生活の中には、似ているけれども大きく違う二つの試みがあります。一つは試練であり、もう一つは誘惑です。ギリシヤ語では同じ言葉が使われているのですが、けれども試練と訳されているところでは、それは良いものとして語られています。誘惑は悪いものとして語られています。ヤコブの手紙で、「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びとみなしなさい。(1:2)」とあります。この上もない喜びとみなしなさい、なぜなら信仰が試されると忍耐が生じ

るからだと言っています。自分が果たして神に拠り頼んで生きているのか、その真価がはっきりと明らかにされるのが、試みを受ける時です。その状況の中でもなおのこと、神に希望を置いているかどうか、試練がなければ決して味わうことのできない、神との親しい関係、その深い信頼が生み出されません。夫婦も共に試練を乗り越えて絆が深まるでしょう。教会も、共に試練を乗り越えた者たちの間には、深い絆があります。

けれども、誘惑は悪魔から来ているのです。罪を犯すように、悪を行なうように唆すことが誘惑です。同じくヤコブはこう言っています。「だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑されたと言っ
てはいけません。神は悪に誘惑されるようなことのない方であり、ご自分でだれを誘惑されること
もありません。(1:13)」神は決して、私たちが罪を行なうように仕向けることはなさりません。あくま
でも、自分の欲があつて、悪魔によっておびきよせられて、誘惑されます。そして「欲がはらむと罪
を生み、罪が熟すると死を生みます。(1:15)」

私たちが慰められるのは、私たちの主ご自身が誘惑を受けられたことです。ですから、私たち
が試みを受ける時に、私たちは決して神から引き離されるようなことはなく、イエス様が共にいてく
ださり、寄り添ってくださり、力を与え、励ましてくださいます。また、イエス様を手本にして、誘惑に
打ち勝つことができます。「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。
罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。(ヘブ
ル 4:15)」

1A 御霊の導き 1

1 さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野の上って行かれた。

イエス様が、悪魔の試みを受けるのですが、まず初めに、その誘惑が、「御霊に導かれて」行わ
れたことに注目してください。ここには大きな慰めがあります。それは、悪魔がどんなに私たちを誘
惑しようが、それはすべて神が織り込み済みだということです。悪魔は猛烈に、私たちを攻撃して、
何とかしてその愛の関係をぶち壊そうとしますが、その攻撃でさえ神の許しなしには起こっていな
いということです。覚えていますか、ヨブが大きな試みを受けた時に、サタンはいちいち、主ご自身
の許可を得なければそれらのことを行なうことができませんでした。ヨブの財産を奪い、息子たち、
娘たちを奪い、そして彼自身の健康を奪いましたが、命そのものには手を出すことができませんで
した。なぜなら、主がお許しにならなかったからです。そしてヨブは最後まで耐え抜くことができた
のです。

私たちに、どんな激しい試みがあつても、このことを思い出してください。私たちがそれを耐え忍
ぶことができると神は知っておられるので、そのことを許されているのです。「1コリント 10:13 あな
たがたのあつた試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あ

あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」主は愛の目をもって、私たちが試練あるいは誘惑を受けている時に、見ていてくださっています。それが耐えることができると、神は初めから知っておられるから許しておられるし、またその中でそこから脱出することができる道も備えていてくださっています。

2A 肉の欲への訴え 2-4

2 そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」4 イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』』と書いてある。」

1B 肉と霊の対立

イエス様が断食をされましたが、四十日四十夜でありました。これは信じがたいと思われるかもしれませんが、水の補給などをすればそこまで持ちます。教会の中で、40 日間の断食をしたということについては、しばしば耳にします。それ自体は大きなことはありません。ここでは、「空腹を覚えられた」というところです。イエス様が明らかに、人間の肉体を取っておられたことを示しています。断食をすると、途中で空腹感がなくなるということです。六日目からその空腹感がなくなるという人もいます。けれども、しばらく経ってから空腹を覚えると、その時には何かを食べないといけません。それは、自分が飢餓で死ぬことになる前兆だからです。ですから、イエス様が今、そのような状態になりました。

ここでイエス様が受けられた誘惑は、単にパンを食べるという誘惑ではないのです。パンを食べること自体が誤っているではありません。聖書では、食事をすることは主にあって喜ばしいことであり、事実、主への祭りのために食べるという行為も取り入れています。教会の中に、パン裂きがあり、また愛餐の交わりもあります。ここでは、食べてはいけないということではなく、「あなたが神の子なら」と悪魔が言っているところです。イエス様が、父なる神から与えられている力を自分の欲のために使っていくということが、ここでの誘惑なのです。霊的に与えられている力を、自分の肉の欲のために使うということが問題なのです。石をパンに変える力は持っていますが、それを御父の栄光を現わすためではなく、また人々に仕えるために用いるのではなく、私欲のために使うように、悪魔は仕向けているのです。

私たちに与えられている、肉体の欲求は、それ自体は良いものです。主が、生めよ、増えよと命じられて、男と女に造られました。もし男と女が一つに結ばれる時に、性欲がなければ、子を生もうとしません。性欲そのものは、主が与えられたものです。同じように食べることも、主の与えられた欲求です。けれども、神をあがめる中で、神が喜ばれる中で用いる必要があります。性欲であれ

ば、神のお立てになった結婚生活の中で用います。しかし、肉の欲求が自分を支配して、神の支配から外れて行こうとする時に、それが情欲となります。肉が霊を支配しようとするのです。それを、パウロは、「霊と肉が対立している」と話しています。「ガラテヤ 5:16-17 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」

2B 御言葉による克服

それでイエス様は、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。」と言われて、申命記にある神の言葉を使って、その誘いを拒みました。ここに大事な原則があります。「私の肉体の欲求を満たす以上に、神の御言葉を慕い求める」ということです。自分が生きているのは、その命は主の語られる言葉一つ一つなのだと知ることです。神の御言葉によって霊が養われ、そして主が付け足して、必要をも満たしてくださいませ。イエス様が、サマリヤの女と話されて、彼女にご自分がメシヤであることを明かされました。その後サマリヤの女が町に戻って、イエス様がメシヤではないかと言い伝えていた時に、弟子たちに対して、「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。(ヨハネ 4:34)」と言われました。主の御心を行なうことによって、すっかり満足すること。それがあたかも、食物を取っているかのように満ち足りることなのです。

私たちには絶えず、「何を食べるか、何を飲むか、何を着るか」というような肉体から生じる欲求が頭をよぎっています。そして、そのような思いを優先させるならば、必ず自分の思いは神から離れていくことでしょう。そして霊的に枯渇状態に陥り、魂は渴き切ります。どんな肉体の欲求や気持ちがあろうが、それでも、「私は、主の御言葉を行なうことによって生きて行きます。」と決めるのです。

3A 目の欲への訴え 5-7

5 すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、6 言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」7 イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」

1B 人あるいは神からの認証

イエス様が、聖なる都、エルサレムに連れて行かれています。そして、神殿がありますが、その頂と言っていますが、これは神殿の敷地を囲む壁の、南東の角の部分と言われています。そこでご自分が神の子であることを示すことができるではないか、自分が神の子であることを示したいのであれば、そうやって公に示すことが大事だ。天使たちが助けてくれるという御言葉もあるし・・・という

誘いであります。イエス様は、似たような誘いを肉の兄弟からも受けました。「そこで、イエスの兄弟たちはイエスに向かって言った。「ヨハネ 7:3-4 あなたの弟子たちもあなたがしているわざをすることができるように、ここを去ってユダヤに行きなさい。自分から公の場に出たいと思いながら、隠れた所で事を行なう者はありません。あなたがこれらの事を行なうのなら、自分を世に現わしなさい。」ご自分に与えられている力を、見せればよいのだという誘いです。

ここでも、人に見せることそのものが悪いことではありません。イエス様は、弟子たちに、「5:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と言われました。けれども大事なのは、自分の今していることが、主から言われて、命じられて行なっていることなのか？ということでもあります。つまり、自分ではなく、主ご自身を証しているのかどうか？ということです。もし自分が主に命じられて行なっていることであれば、人々は自分をあがめるのではなく、天におられる父をあがめるはずです。主に言われているのか定かではないのに、それでも行なっているならば、それは悪魔の囁きであることを見ぬかいないといけません。

私たちには、肉体の欲求だけでなく、承認欲求というものがあります。「認められたい」という欲求です。そのために、自分を見せるためにあらゆることをしようとします。人にどのように見られるかを気にしています。しかし、それでは報いはない、虚しいことを主は教えられました。「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。(マタイ 6:1)」自分が承認されるのは、人に対してではなく、神に対してです。父なる神が見ておられ、この方に認められるために動くことです。イエス様は、隠れたところで善行をしなさい、「そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。(6:4)」と言われました。

2B 主への試し

そして、ここでイエス様は、「あなたの神である主を試みてはならない。」と言われています。自分が神殿の頂から落ちることによって、主が御使いを送ってくださると敢えて要求しているわけです。そこには、信頼関係がありません。主が確かに助けてくださると約束して下さっていても、それをお願いするのではなく、要求するのではあれば、主を信じているのではなく、むしろ主を信じていないから要求しているのです。私たちが主に仕えていく時に、試して行なっていく誘惑があります。「これこれをやれば、何かが起こるはずだ。」として、主から命じられているのではないのにやっていく過ちがあります。

分かり易いのがマルコ 16 章にある、「たとえ毒を飲んでも決して害を受けず(18 節)」という約束があります。それで、敢えて蛇に噛まれてそれでも害を受けないことを証明しようとする試みが、教会でなされたことがあるとのこと。それで死んでしまった人もいと聞いています。しかし、

福音を宣べ伝えているところで、自分に害になるのではないかと思われているものでも、それでもしなければいけないことがあります。ポウフラが浮いている水を飲み干さないといけないとか、そういったことがあります。敢えてそれを行なうのではなく、そのような状況に置かれた時に、主が助けてくださるのです。

3B 文脈を外した御言葉

そして、初めに悪魔がイエス様を試した時、御言葉によって対抗されたので、悪魔も今度は御言葉を使って誘惑したのに気づいてください。詩篇 91 篇にある言葉を使ったのですが、イエス様はまた他の御言葉を使って対抗されました。ここに、聖書全体を読み、そのバランスの中で御言葉を読んでいく、文脈を考えながら読んでいくことの必要性があります。自分の思いが優先して、聖書の言葉さえその思いを正当化するために使用してしまう場合もあります。主が全体の中で何と語られているのかを、主から聞き、そして個々の御言葉に取り組む必要があります。

4A 高ぶり 8-11

8 今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、9 言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」10 イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」

1B 神の立てられた目的 8

悪魔は、イエス様に対して御言葉をもって惑わしましたが、今度は、そのまま真っ直ぐに誘惑しています。それは、イエス様は世界の救い主、メシヤになる使命を持っているからです。世界の救い主になり、世界の王になるように神に召されています。世を神の下に贖い出すことが、キリストの来られた目的です。

2B 神の定められた手段 9

そこで悪魔は、今、「あなたは手っ取り早く、この世界を自分のものにしなさい。」と誘い入れているのです。この世にある栄華を全て見せて、「これらがあなたのものです」と言われています。しかし、主イエスは拒まれました。なぜなら、世界の贖い主になることは神の御心ですが、たった今、サタンを拝む形で贖い主になることは御心ではないからです。イエス様は、世界の贖いのために、ご自分の血を流すという対価、犠牲を払わないといけません。十字架の道を行くことによって、その尊い血潮が流されることによって、初めて、いと高い方の右の座に着かれるのです。ですから、神の立てられた目的があっても、神の定められた手段にも従う必要があるということです。私たちは、今すぐに得たいものを得なさいという圧力をいつも受けています。この満足は今、満たされればよいと思います。その心によって、あらゆる誘惑に陥ります。

3B 神への礼拝と服従 10

そしてイエス様は、「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」とされています。要は、主を試してみたり、主の命じられていないことを行なわないことです。ただ主を主とすること、主を礼拝すること、そして主に服従すること、主を恐れることです。

5A サタンの休戦 11

そしてこれこそが、サタンが退く方法です。

11 すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。

ヤコブは言いました、「神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。(4:7)」悪魔は逃げ去るには、まず神に服従することです。イエス様がここで行われたように、みことばを通して神に服従するのです。そうして、その攻撃していることに対抗します。すると、悪魔は離れて行きます。けれども、これは休戦状態です。いつも虎視眈々と狙って、私たちと神との間にある愛の関係を壊そうとしています。

ですから、私たちは目を覚ましておく必要があります。いつも世は、私たちの欲を刺激します。肉の欲があります。自分が肉体の欲求としてしたいことを優先してしまう事です。そして目の欲があります。どう見られているのか、ということでもあります。そして自慢や高慢がありますね、主が下さる恵みではなく、自分にあるものを誇るのです。私たちの敵はですから、身近にあります。実に私たちの中にあります。主に従って、御言葉に頼って、御霊に導かれることによって、悪魔に対抗しましょう。